

観想の時

——長歌体詩篇二十一——

北原白秋

青空文庫

黎明の不尽

天地あめつちの闢ひらけしはじめ、成り成れる不尽の高嶺たかねは白妙の奇しき高嶺、駿河甲斐ふたくに二国か
 けて八面やおもてに裾張りひろげ、裾広に根ざし固めて、常久に雪かつく峰、かくそそり聳やき
 ぬれば、厳いかにしくも正ただしき容かたち、譬たとふるに物なき姿、いにしへもかくや神さび神ながら今に古
 りけむ。たまたまに我や旅行き、行きなづみ振さけ見れば、妻と来てつつしみ仰げば、あ
 なかしこ照る日もわかず、暮れゆけば雲巻き蔽おほひ、霹はた靨がみはためくさへに、稲光青さをの火
 柱、火ばしらの飛ぶ火のただち、また、とどろ靄あぞ飛びたる。御殿場のここの駅路うまやじ、一
 夜寝ごやて午夜おとふけぬれば、まだ深き戸外このもの闇に、早や目ざめ獵かりいぬ犬が群、勢きはひ起おこき鎖くわ曳ひきわ
 き、跳おとり立ち啼なき立ち急せくに、朝獵の公達か、あな、ひとしきり飛び連れ下りる騷さわぞきの、
 さて出立でたつらむ。けたたましく自動車自動車の鳴り爆はぜる音、咽喉のどぶと太の唸り笛さへ凝こり霜の夜凝よご
 りに冴さえて、はた、ましくらに何処いづくへか駈かけ去りぬ。底冷そこひえの戸の隙間風、さるにても明
 け近ちかからし。目のさめて明告あけつげどり鳥の息長に啼なき呼よばふ声、そことなく応こたふる声の裾野原裾野原揺
 りどよもすに、おのづ覚め我は在りけり、目はさめて我もありけり。つくづくと首延のし見

れば、こちごちの濃霧こせりのなびき、溪の森、端山こひだの小巖黒ぐろとまだ気けぶかきに、びようびよう
ようと猛ける遠吠、をりからの暁あかつきやみ闇あを続け射つ速はや弾たまの音。たださへも益良夫ごころ
溢れ揺り抑へもあへぬを、見透かせば渦巻く霧の瑠璃雲の漂ひが上、数かぎりなき糠星の
瓔珞うちの中、あなあはれ不尽の高嶺ぞ、白妙の不尽の高嶺ぞ、今し今、一きは清き紫の朝よ
そほひに出で立ち立てり。夢か、こは、まことなりけり。夢ならず、現うつなりけり。起きよ
起きよ。まことこれ日の本の不尽、木花咲耶姫の神、神しづまりに鎮まらず不尽の御嶽みたけぞ、
見よ目に見えて近ぢかと明け初むるなれ。起きよとて妻揺りたたき、目ぎめよとまた呼び
覚まし、口漱ぎ、さて、身をきよめ、さむざむと袂合はし、しみじみと二人い寄り、ひた
すらにかくて見恍ほれぬ。時ありぬ。やや時経れば、ほのぼのとして薄明る山際やまぎはの色、黎し
ののめ明の薄樺いろに焼け明るその静けさに、日出づる前か、明鴉かをかと二羽連れだちて
羽風切る、その羽裏いよよ染みたり。はたはたと山鳩もまた二羽競ひ行く。観る人も妻と
し見れば飛ぶ鳥も連るものかも、うれしやと妻は見て云ふ、我もまた微笑あかみて見つ。さ
るからに、薄紅き蓮華の不尽の隈ぐまの澄み明りゆく立姿いたゞきべ、頂いたゞきの辺は更にも紅あかく、つや紅
く光り出でたれ。よく見ればその空高く、かすかにも靡くものあり。高うして吹雪すらし
か、かすかにも雪煙立ち、その煙絶えずなびけり。いよいよに紅く紅く、ひようひよう

立ちのぼる雪の焰あまぢの天路あまぢさしいよよ尽きせね、消えてつづき、消えてつづけり。あなあはれ、かのいつくしき、このかうかうしき。眺むれば見れども飽かず、言ことにさへ筆にさへ出ね。あなかしこ、不尽の高嶺は日の本の鎮めの高嶺、神ながら奇くすしき高嶺、この高嶺まれに仰ぎてこの朝あした新あらたにぞ見て、この我や、ただこの妻と、ただ得も云へず涙しながる。

遠山脈の歌

上つ毛かむらの加牟良あまの北あまに天あまそそる妙義荒船、遥はろぼろと眺めに出れば、この日暮ひぐりさけ見れば、いや遠し、遠き山脈やまなみ、いや高し高き山脈やまなみ、いやが上へに空に続き、いや寒ひだく襲ひだを重ねて、幾重ね、幾重たたなはね、幾重すゑり、末遂すゑに雲居すゑにぞ入る。かりそめの旅にはあれど、夕されば内にも堪へず、外とに出でてひとりありけり。向ひ吹く川の瀬の風、川風の吹きここの凍えここに我が向ひ迎る高崖、遥か見る北の山脈。冬も早や絹のつや雲、卷雲の巻きのなびきに、氷凝ひこり雲層かさぐも雲の群、重ね雲、寂び金の雲、下明あかり雲ともわかず、薄うつつぎらひ山ともわかず、たださへも現うつつならぬを、たださへも果てしわかぬを、日の射すか末広の虹幾すぢか透きて落せ

り。かうがうしその薄光、寂び寂びしプラチナのすぢ、濃き淡き峰の畳みに、引きちがふ山の小巖に、また雨と和み注げり、柔かき金色の霧。あな遠し遠き山脈、あな高し高き山脈、立ちとまり見れども消えず、目ふたぎて傷めど尽きず、目翳げして遙けみ見れば、いや寂し薄き陽の虹、また見ればさらに彼方に、いや高き連山の雪、いや遠き連山の雪、ひえびえと、つぎつぎと、続きつづきて耀きいでぬ。

竹と曼珠沙華

わが門の竹の林に、曼珠沙華赤く咲きたり。竹の根の一つ一つに、この華や六つ七つづつ、日に増しに数かさみゆく。怪しくも赤き卷髭、髭細の蓮華なす華、咲き盛るその華見れば、おのづから秋も澄みけり、いよいよに風も寂びけり。隣り寺、寺の古墓、日あたりは未だも暑けど、墓掃くとかがむ影すら、阿闍波むと寄るすらも無し。あなあはれ、摩訶曼珠沙華、出で入るとひとり眺めて、時をりは妻と眺めて、昨日ゆかいよよ殖えしと、まだ今日も赤しとぞ見る。孟宗のしだれ笹ゆゑ、陽は射せどいぶせき藪を常くぐり我は在り

けり。わびしけど遊び馴れけり。山住の心安きは簔越しに浪の音聴き、里囃子うれしとも
 聴け、施餓鬼過ぎ流石さびしく、人訪はぬ今は堪へえね、また出でて竹の根見れば曼珠沙
 華赤く赤きに、ちらと向き、釣眼つりめ野狐、うしろ向き尖り口して、小簔吹き、吹き吹く風に、
 日の暮に、あな、飛び飛びて消えつつ失せぬ。

竹の林の歌

雨あとの竹の林に、夕あかりかがよふ見れば、その竹の湿しめる根ごとに、何か散り、深く
 光れり。その節のひとつひとつに、何かまた溜り光れり。其笹のさみどりの葉に、何かま
 た揺れて光れり。金色こんじきのその光るもの、こまごまと目に染しみるもの、雨ふりてあかれる
 のちは、とりわけて揺れてうつくし、寂しくて見てあるきははいよいよ消えてうつくし。
 揺るるともただ見て居をらむ、消ゆるともまた見て居らむ、堪へ堪へて日の暮るるまで、な
 ほなほに寂しがりつつ。わが宿の竹の林の夕あかり、裏山松の松風も聴けば親しさ。

蝸の歌

蝸かなかなの啼き連るるなり。二つなり。啼き連るるなり。その二つ啼きやめばまた、こなたよ
 り啼きしきるなり。ただ一つ啼きしきるなり。孟宗の片日射なり。山松の遠日射なり。か
 なたには輝りきらふ海、こなたにはわたる山霧、山ぎりに山の施餓鬼のほとほとに果つる
 頃なり。金色こんじきに秋の日射の斜なし澄みとほる中、蝸かなかなは啼きしきるなり。急せき急せきて啼き
 刻むなり。二つ啼き、一つ啼き、また、こもごもに啼き速はやむなり。

蝸が二つ啼きまた一つがこもごもに

湯どころの秋

ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯のけぶりかも。日のあたる原のかたへに櫛立

ち、櫂の傍に斑まだらうし牛ひとり居りけり。安らかに繋がれてけり。山峡の湯どころの秋。出て見れば、下の小橋を杖つきて渡る子もあり。垂稻の黄ばむ田づらはをりふしに雀むれ立ち、道ぞひの茅屋の庭に白菊の盛り見せたる、胡麻と栗並べ干したる暇いとまある心に見ればなかなか今日は安けし。向つべに日のかげる山、なほ明あかく温かき山、その空の白き綿雲、ちろちろと渡る禽とりさへなかなかにはれとも見れ。妻と来て、二人来て、七日まり住み馴れてのち、やうやうに紅葉もみぢ色づく遠をちこち近のこの眺めなる。あなあはれ、ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯のけぶりかも。日のあたる原のかたへに櫂立ち、櫂のかげに斑牛ひとり居りけり。繋がれてただねんねんと草食はみにけり。

秋山の歌

秋山のなぞへの薄すすきひとつらね揺りかがやけり。秋山の名も無き山の草山の山の端はすすき薄、その穂の薄揺りかがやけり。この夕、出いでて見て、岨そはゆ見て、丸木橋妻と渡りて、また見ればまだかがやけり。その薄刈る人もあり。また負ひて下り来るもあり。下りて来て、行

きすぎざまにさわさわと背見せゆく、さわさわの背の薄またかがやけり。雲白くうかべる
峡の日屯の空間の中、こまごまと飛べる羽虫も、よく見れば一つ一つに命あり、舞ひ
立ち光る。閑かなり、ただ安らなり。まだ深き日のあたりなる。暑からず、寒くしもなく、
まだ温き日のかげりなる。湯どころのうしろの山の秋山のその柔かき草山のこのもかのも
にさわさわと音する薄、穂薄の、今日来て見れば、揺りかがやけり。あなあはれ、我も見
て、妻も出て、二人ながむるさわさわ薄、そのさわさわ薄。

岡の鉾杉

わが宿の岡のなぞへに杉いくつ屯せりけり、せうせうと屯せりけり。鉾杉のひとむら木
立鉾杉の鉾を並べて、この朝明しぐるる見れば、霧ふかく時雨るる見れば、うち霧らひ、
霧立つ空にいや黒くその秀うかび、いや重く下べ鎮もり、いや古く並び鎮もる、凡てこれ
墨の絵の杉、見るからに寒し厳かし、かうがうし、寂し崇高し。あなあはれ、岡の鉾杉、
をちこちの小竹のむら笹、柿もみぢ、梅が枝の蔦、とりどりに色に出づれど、神無月すゑ

の時雨に濡れ濡れてその葉枯れず、落葉せず、透かず、薄れず、ただ上^{うは}べわづか^{あか}赭みて天
 鷺^{ろうと}絨の焦茶いろすれ、深^{ふか}ぶかと黒くか青く、常久に古び^{しづ}鎮もる。寂しくも寂しき姿、堪へ
 堪へて常立つ心。あなあはれ冬の銚杉、海ちかき岡の銚杉、銚杉の渦^{うづな}成す霧に、涯^{はて}知れぬ
 海も見わかず、ひさかたの空もえわかね、時をりは渡りの鳥のはぐれ^{どり}鳥ちりぢりと落ち、
 羽^{はね}重の一羽鴉も飛びなづみややに来て揺る。あなあはれ、雨の銚杉、見てあれば幽^{かす}かに
 揺れて、ふる雨に幽かに揺れて、ただせうせうと音たてにけり。

榧と栗

伝^{でん}肇^{でうじ}寺、小^ちさき古寺、此寺の山の墓場に、榧^{かや}と栗並び立ちたり。並び立ちともに老い
 たり。榧の木は栗の木のそば、栗の木は榧のかたへにさびさびて、すでに老いたり。その
 榧よいつよりか老い、この栗よいつよりか立つ。榧と栗さびにさびつれ、なほし未^まだ花は
 咲きけり。年ごとに花はつけけり。榧の木はかすかなる花、栗の木は露^あはなる花、その榧
 に小^ちさき榧の実、この栗に栗の青毬、風吹けば実さへ毬さへまたいつかこぼれこぼれぬ。

枯れ枯れて土にかへりぬ。見る人も知る人もなし。寺まうで墓まうでびと、たまさかに蹲み通れど、誰ひとり振り仰がず、誰ひとり眼にもとめねば、ただ二木立てるのみなる、榎と栗さびるのみなる。あなあはれ、榎と栗の木、落葉する栗も寒けど、常青く立てる榎の木、冬の日はことに高しよ。栗の木はいよよ透けれど、榎の木はいよよか黒く、薄日射函根の入陽秀に受けてひとり尖れり。いや黒くひとり堪へたり。雨まじり霏ふる日も風まじり雪の飛ぶ夜も、こごしくも凍え立ちたり。親しくも立ちて堪へたり。あなあはれ、老木の二木、親しくも並ぶ姿の、寂しくも隣り合ふ木の頼り無き二木を見れば涙しながる。

孟宗と月

さわさわと揺るるものあり。午夜ふけて揺るるものあり。わが窓の硝子戸の外、真透せば月に影して凍え雲絶えず走れり。円かなる望月ながら、生蒼く隈する月の、傾けばいよよ薄きを、あな寒や揺るる竹あり。孟宗の重きしだれの重なるその上に抜けて、ただひとり揺るる秀のあり。目か醒めし、夜風か出でし、さわさわと揺れて遊べり。しだれつ

つ前にうしろに、照りかげり揺れて遊べり。円まどかなる望月ながら生なま蒼あをく隈くまする月の飛び
 雲の叢むらくも雲が間あひ、ふと洩れて時をり急に明るかと思ふ時なり。目に見えてさわさわと、
 照り浮ぶ孟宗の、あな、一きは強き、狐きつね光びかりのその月に、さながら生きて踊るかに、近ち
 明かあかりして勢きほひ舞ふ、かと思れば、また、何か暗く薄かげりして、揺ゆらぎ止み、揺ゆらぎ騒さわ
 立つ。此夜よさや、夜鳥も啼かず、藪とかげの隣となりの寺もしんしんと兩戸鎖さしたれ。時として川
 瀬おとの音の浪の音ねと響き添ふのみ。それもただ遠し、氣疎けうとし。あなあはれ、この夜の山に、
 何しらず目のさめしもの、我のみか、揺れそよぎあり。揺れそよぎ、独り遊ぶと、揺れそ
 よぎ、この目の外そとに、また、さわさわと音立ててゐる。

冬の山の岨

玉くしげ函根の山は短か日のことに短かく、み冬さき霜下おり来れば、午過ひるぎて日の目も
 知らず。向つべの山は明れど、こなたなる高山の岨そは、風寒く木の葉ちるのみ。早や早やも
 土は凝こりて、岩角の犬羊齒いしが下、枯れ枯れの雑木の根ごと、そくそくと氷柱つららさがれり。ほ

きほきと、氷柱搔き折り、かりかりと嘯みもて行けば、あな冷た^{つめ}、つめたかりけり。妻もまた冷たよと云ふ。二人ゆく高崖の上、何の枝ぞ透きてこまかにつや黒の果をちらつかす。ふり仰ぎ透かし見すれば、高く澄む空の青きにひえびえといそぐ雲あり、また薄く消ゆるものあり。長尾鳥飛びて叫ぶに行きなづみ、蹲みてあれば、あなさむや、溪裾紅葉銚杉の暗きを出でて、ひと明り紅く燃えたり。その紅葉淵に映れり。人知らぬ寂びと静けさ。その下に飛び飛びの岩、岩もまた幽けかりけり。冬はなほ幽けかりけり。あなあはれ、櫟の枯木、行き行けば見る眼に聳え、滝落ちてかげり陽迅し。あなあはれ、山の端薄陽。下見れば早や塔の沢、こちごちに湯の香煙りて、ちらちらと揺るる燈の見ゆ。海見えて漁火つく見ゆ。この岨や馴れし山岨、遠く来し旅にもあらね、さは急ぐ道にもあらず。我がどちや言にこそ出ね、今さらの連れにもあらねば、ただ二人ほつりほつりと、日の暮はほつりほつりと、また家路さし下るのみなり。下るのみなり。

冬の棚田

丘窪の冬の棚田たなだはねもごろにうれしき棚田。寂び寂びて明るき棚田。たまさかに鶺鴒茶の
 刈田、小豆いろ、温かきいろ、うち湿しめる珈琲つちの土。下田しもたにはいくつ稲村プラチナ白金なごの笠めき
 め、上畑かみばたは緑の縞目、わづかにも麦ぞ萌えたる。その畑に動く群むらどり禽、つくづくと尾羽
 根振りては、また空へ飛び立ち翔かける。あな冷つめた群むれの鶺鴒せきれい群れ飛べど目にもとまらず。い
 づこにか鶺鴒ひよは叫べど、風騒ぐけはひも聴かず。ただ低き日あたりの中、茅屋根の物静かな
 る、紫に寂び沈みたる、人気なき庭にはあれど、背戸ごとに柿の実も見ゆ。裏丘へのぼる
 小径こみちは孟宗の林に見えて、その藪の上の日向に蜜柑もぐ人もよく見ゆ。声高にさては語り
 て燧石ひうち切るたばこび 火も見ゆ。珍らかにいとど澄めばか、遠近の枯葉のくぬぎ、草もみぢ、耀
 く薄、おしなべてかくて安やすけし。あなあはれ、ここの丘窪、明るけど古さび棚田、うれし
 けど冬の日棚田、その空に翔かける群むらどり禽、鶺鴒の薄黄の尾羽のただ波うちて影もとまらず、
 影もとまらず。

荒浪千鳥

磯長の小ゆるぎの浜、この浜や荒浪高し。この夜ごろいよいよ高し。時化つづき西風強く、夜は絶えて漁火すら見ね、をりをりに雨さへ走り、稲妻の青の映りに、鍵形の火の枝の棘ひりひりと鋭き光なす。其ただちとどろく巻波。時として雹さへ飛ぶに、なにぞ何ぞ乱るる鳥は。なにぞ何ぞ散り散る鳥は。目に見れば数かぎりなく、声きけば消なば消ぬかに、へうへうと連れ啼く鳥の、百千鳥、荒浪千鳥。荒浪の穂立の空を、とまるすべ、寝るすべ知らに、ただ飛びて散り散る千鳥。此海や涯し知られね、この荒れや測り知られね、初夜過ぎて、また後夜かけて、闇ふかく翼ふる千鳥、この雨を、また稲妻を、ひた濡れて乱るる千鳥。ある声は遠くはぐれて、ある群は千鳥型して、また或るは陸の方向き、また或るはちりちりと散り、すれすれに或るは落ちつつ、波の上驚きて飛び、時に消え、時に明り、いよいよに暗く恐れて、いよいよに青に染まりて、時わかず連れ啼く千鳥、へうへうと凍ゆる千鳥。いつまでか全く迷ふぞ、いつまでか飛びてやまぬぞ。

磯長の小ゆるぎの荒浪千鳥。荒浪の天うつ波の逆まきのとどろきが上、あああはれ、また向き向きに、稲妻の青の脅えに連れ連れ乱る。啼き連れ乱る。

落葉行

ひとりゆくこの山岨やまそじまは落葉のみ溜り湿しめれり。落葉踏みつつ行けば、いづく飛び鶴高音
 うつ。かさこそり、櫟くぬぎの枯葉わがかたへまた声立てぬ。日おもての草崖くさがけすゝき薄、その穂に
 も落葉かかれり。草紅葉まだ温ぬくけれど、その上へにも落葉うごけり。向ひ山、こなたの小
 丘、見るものはみな枯木のみ。空ぐるま軋るを見れば、上岨うはそじまを尻毛振る赤馬あか、ひょうひ
 ようと吹かれゆく馬子、みな寒き冬のものなり。溪の上への小茶屋の椅子も紅葉積み、その
 溪かけて、はらはらと落葉ちりゆく。山窪ぼらの幾むら藁屋、水ぐるま廻まはれる見れば、ほとほ
 とに水も瘦せたり。櫟原ばらただ目に寒く、入りゆけば陽ひの目薄きに、雨のごとちる落葉あり。
 よく見ればいよいよ繁し。声立てていよいよ寂さびし。ほうほうと立てる雑木の岨路そぢちゆき、別
 れ徑みちゆき、当処あてどさへ果てはわかねど、風のまま歩みのままに、行き行けばただ落葉なり。
 前うしろただ落葉なり、かさこそと、また、はらはらと、空にも地にも声ばかりして。

落葉吟

かうかうと照る月ながら、雨のごと飛ぶ落葉かな。ああ落葉、その影見れば、秋も早や
老いにたるらし。ああ落葉、その声きけば、おのづから冬か待たるる。身の老おいといふには
あらね、おのれまた若しともなし。さやけさはかかる夜ながら、見の恍ほれむ光にあらず。
杉木立青きはあれど、隣となりやま山早やも痩せたり。枯れ枯れの木の枝えを透きて、月はただ遠
くあらはに、落葉また風に吹かれて、へうへうとかぎりも知らず。いつの日かまたと還ら
む、いつの世か久しかりちふ。これやこの常なかる世に年月の移らふまにま、我はあり、
我はあれども、いつ知らず後あとべのみ見る。なほなほも先きぞ気遠き。而かもなほ過ちにけ
り。つくづくと耻ぢ泣きにけり。さりとは諦あきらめも得ず、また和のどの悟りをも見ね、ただす
こしおのれ知るからただ堪へて遯へりくたるのみ。ややややかにかくてあるまで。寂しがり寂しがる
なる。ほとほとに堪へは得ぬとも、この寂びや、身もて得し寂び、せめて者まだ頼りなる、
ただたのみただ守るべき。ただひとり物も思はむ。さてひとり歩み歩まむ。あはれなる末
の末かも、飛びちらふ落葉なるべき。落葉なら風のまかせよ。照る月に、北山風に、夜あ
らしに、影は影とし、はらはらと、ただ、はらはらと声ばかりせよ。

おらもまたあなたまかせぞ一茶坊

水仙と菊

窓掛の絹寒冷紗、硝子扉の外の短か日、短か日の斜の陽ざし。窓掛の絹寒冷紗、其蔭の水仙と菊、鉢台の薄玻璃の壺。今朝咲きし一重水仙、いつの日か挿しし寒菊。冷たくて白き水仙、やや温く黄なる寒菊。水仙の青の葉は張り、寒菊の葉は半ば枯る。水仙は水仙の影、寒菊は寒菊の影、その壺も玻璃の影して、栗色の砂壁に在り。硝子透き、窓掛を透き、斜め陽の明るみぎりは冬もなほいつくしく見ゆ、頼無き影としもなし、柔かく親しかりけり。薄玻璃の影もゆらげり。妻とある二階の書齋、午過ぎはただ閑かなり。湯沸のふき立つる湯気、わがふかす煙草のけむり、また揺れてその壁にあり。妻の影、わが影もあり。水仙と寒菊の花、現身に正眼に見れば、まこと今あはれなりけり。水仙と寒菊の影、現なく映らふ観れば現なし、寂しかりけり。近々と啼き翔る鶉、遠々とひびく浪の音。誰か世を常なしと云ふ、久しとも愛しとも思へ。山に住み世に離るとも、全く世を厭ふにあ

らず、五月蠅うるさやと切せちに思へど、人來ねばたづきも知らず、妻と我、二人居れども、かくてあれども、時をりはただ寂しくて眼を見合せぬ。

竹林の早春

わが庵の竹の林にこぬか雨今朝しめも湿れり。春さきのこぬか雨なり。ふるとしも見えぬ雨なり。こぬか雨笹かうたにこもりて、香焼かうたけば香かうもしめりて、事もなし、ただ明るけし。こまごまと濡れかかるのみ、漂渺と煙曳くのみ。しづかなり、唯安らなり。顔出してつくづく居ゐれば、笹子啼き、目白寄り来る、笹葉揺り揺りて又去る。散りたる去年こぞの枯葉も寂しけど寒しとも無み、何かしら萌ゆる緑の春は早や竹の根にあり。よき湿しめりかくて湿らば、竹煮草、葛、露の臺ややややにすずろき出でむ。髭長の藪の菫蕪、董など、やがて咲くべし。松風の声は沈めど、常ならぬわびしさならず。裏うらそ岨そののぼりくだりに、ほつほつと通る馬さへ時をりは青きつけつつ、声高こはだかの人の話も濡れながら行けば親しき。静かうこころ香をつぎつつ、さて、今日もうら安くこそ。こぬか雨ふるがごとくに、こまごまといつくしみ

てむ、春さきの我の思を。

元旦の夜のこと

あな疎忽そこつ、吐息といきいでたり。気にかけて、何といふ事もあらぬを。また妻よ、焙ほうじてむ玄米の茶を。来む春の話、水仙の話、やがて生れむ子のことなども話してむ。元旦のこの夜の深さ。山住の我らなるゆゑ、いついつとかはりは無けど、今日はまたとりわけて、とりわけてよろしかりけり。全く今しづかなりけり。今さらに何をかや云ふ。この夜さのこの安けさは神ぞただ守りますべき。心ゆくうれしさの中、我は唯詩を思ふなる、汝みましまた差しのぞくなる。しづかなり、ただあはれなり。筆動く音のみぞする。身じろきの、息のみぞする。さてあらば夜も明けぬべし。あれ聴けよ、鶏啼とりくらしき。また聴けよ浪の音なる。二人ただかくて起きゐて、まこと今ただ二人なる。二人なるいのちの息のおのづから触れかよふかな。親しくもゆき通ふかな。蜜柑など一つむきてむ。近々と火にむかひるむ。またすこし炭つぎ足して、さて待たむ。二日の朝の海原の紅き日の出を。

露の臺

新らしき露の臺かな。珍らしき苦^{にが}き香^かぞする。その露の臺一つ刺し、二つ刺し、竹の小串に三つ刺して、さて味噌つけて、火に焼きて、あな苦さよと一つ食べ、あなうまさよと二つ食べ、あないつくしと三つ食べて、さてさびしやと我あたり。春さきの夜のあは雪の消^けなば消^けぬかの声聴きてけり。そのしばらくは。

聴けよ妻ふるもののあり

聴けよ、妻、ふるもののあり。かすかにもふるもののあり。初夜過ぎて夜の幽^{かす}けさとやなりけらし、ふりいでにけり。何かしらふりいでにけり。声のして、ふりまさるなり。雨ならし。いな、雪ならし。雪なりし。雪ならば初^{はつ}の雪なる。よくふりぬ。さてもめづらに

ふる雪のよくこそはふれ、ふりいでにけれ。さらさらとまた音たてて、しづかなり。ただ深むなり。聴けよ、妻、そのふる雪の満ち満ちて、ただこの闇に舞ひ深むなり、ふりつもるなり。

たまさかに浪の音する夜の雪なり

ころころ蛙の歌

春さきのころころ蛙、一つ鳴き二つ鳴き、ころころと後あと続け鳴き、ふと鳴き止み、くぐみ鳴き、また急に湧わきかへり鳴く。いよいよに声合あはせ鳴く。近き田のころころ蛙、よく聴けば声変り鳴く。声変り一つ一つに、あなをかし、鳴けるさま見ゆ。あちら向きこちら向き、飛び飛びて、また水くぐり、うちひそみ、頬をふくらかし、鳴き鳴ける咽喉のさま見ゆ。あなをかし近田の蛙。さみどりの根芹が湿しめる、塗ぬり畔あぜかまだ新らしき。雨もよい雨よぶ声の寒けども寒しともなし、寂しけどなにか笑へり。友よびてまた鳴く蛙遠田にも遙か

どよもす。あなあはれ遠田の蛙、また聴けば遠く隔てて、夜の闇の瀬の音隔てて、いや離さかりうち霞み鳴く。また寄せて近まさり鳴く。遠つ浪辺へに寄すること、遠つ風吹き寄すること、その声は夜空つたひて、いよいよ近く響きて、さて絶えて、また続け鳴く。近き田もまた競ひ湧く。初夜過ぎてまた後夜ふけて、なほなほにどよもす声の、おそらくは夜の明くるまで。萌黄月、月の円まろがき暈、遠近の薄き飛び雲、濡れ濡れてちらめく星の糠星のかけ白むまで。ころころとまたころころと、夜もすがら、夜をただ一夜、春さきのをさな蛙が、声かぎり、また声かぎりここたく鳴くも。

青空文庫情報

底本：「白秋全集 8」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日発行

底本の親本：「大観 二月號 大隈侯哀悼號 第五卷第貳號」實業之日本社

1922（大正11）年2月1日発行

初出：「大観 二月號 大隈侯哀悼號 第五卷第貳號」實業之日本社

1922（大正11）年2月1日発行

入力：フクポー

校正：岡村和彦

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

観想の時

——長歌体詩篇二十一——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 北原白秋

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>